

5 宇部の現代はどのような時代だろうか

◎学習課題

- ・この時代のできごとのうち、始まったものと終わったものに分けてみよう。そこから、どんなことがいえるだろう？
- ・この時代のもっとも大きなできごとは何だろう？それは、なぜだろう？
- ・この時代を区分するとすれば、どのように分けることができるだろう？それは、なぜだろう？
- ・宇部のできごとと日本全体のできごととの関係で、どんなことがいえるだろう？
- ・この時代は、どのような時代といえるだろう？

		宇部のできごと	歴史上のおもなできごと
20世紀	近代		
	昭和時代	1945 1947●新制中学校が開校する 1949●県内第一の工業都市になる 1950●宇部港が甲種重要港湾に指定される 1951●常盤通りに50メートル道路が完成する 1954●厚東・二俣瀬・小野・東岐波の各村が宇部市と合併する 1955●船木町・万倉村・吉部村が合併して楠町になる 1961●常盤公園で第一回野外彫刻展が開催 ●船木鉄道が全線廃線 1963●恩田プールで山口国体夏季大会が開催 1966●宇部空港利用開始 1967●宇部鉱業所(宇部最後の炭鉱)が閉山 1968●沖ノ山小学校が廃校 ●市の人口が15万人台を割る 1970●大気汚染対策委員会を宇部市公害対策審議会に改組する 1973●小羽山ニュータウンの造成開始 1974●山陽新幹線が開通する 1975●山口宇部有料道路の一部が開通する ●丸山ダムが完成する 1976●宇部市文化会館が完成する 1980●宇部空港が山口宇部空港に改称 ●ニューカッスル市との姉妹都市提携 1983●宇部興産に石炭火力発電所ができる 1985●非核平和都市宣言を決議する	1946■日本国憲法の公布(47施行) 1950■朝鮮戦争 1951■サンフランシスコ平和条約 ■日米安全保障条約 1954■自衛隊の設置 1956■日ソ国交回復 国連に加盟 1960■日米新安全保障条約 1963■部分的核実験停止条約 1964■東京オリンピック 1965■同和对策審議会の答申 ■日韓基本条約 1968■小笠原諸島が日本に復帰する ■国民総生産、資本主義国第2位 1970■大阪万博 1972■沖縄が日本に復帰する ■日中の国交正常化 1973■石油危機 1978■日中平和友好条約 1979■国際人権規約を批准する 1989■ベルリンの壁崩壊 1992■PKO法成立 ■国連平和維持活動協力法成立 1994■政治改革関連四法成立 1995■阪神・淡路大震災 1997■アイヌ文化振興法制定
21世紀	現代		
	平成	1989 1991●ときわ湖水ホールができる 1992●中国威海市と友好都市提携を結ぶ 1995●リサイクルプラザが完成する 1997●UNEP(国連環境計画)より「グローバル500賞」を受賞する 1998●中国地方初の「男女共同参画宣言都市」となる 2004●楠町が合併する 2006●「国民文化祭やまぐち2006」開催 2011●「おいでませ!山口国体」開催	1999■アメリカ9.11テロ事件 2002■日朝首脳会議(平壤宣言) 2003■イラク戦争 2004■自衛隊をイラクに派遣 2006■教育基本法改正 2008■アイヌ民族を先住民族とすることを求める国会決議 世界金融危機 2011■東日本大震災

財閥解体、農地改革、女性参政権

経済が復興する

高度経済成長

欧米諸国との貿易
摩擦が激化する

(1) 戦前と戦後の変化

■戦時下の記念会館前の様子（1944（昭和19）年頃）



『ふるさとの思い出 写真集 宇部』から

■戦後の記念会館前の様子（1948（昭和23）年以降）



『宇部・小野田・美祢の100年』から

2枚の写真を比べてみて、どうですか。同じ建物の周辺でも時代によって雰囲気が異なることが読み取れるでしょう。渡辺翁記念会館の建設が始まった1935（昭和10）年は、戦争への足音が徐々に高まってきたころです。戦争が始まると、空き地には作物が植えられ、食糧不足を補いました。家の庭先のわずかばかりの空き地にも芋やかぼちゃなどが植えられました。みなさんのおじいちゃんやおばあちゃんのなかには、実際に経験された方もいらっしゃるかもしれません。

やがて、戦争が終わり、人々の暮らしも落ち着きを取り戻すと、会館前の池はプールとなり、子どもたちがはしゃぎ回る様子へと変わりました。戦争が人々の暮らしを大きく変えてしまうことが分かります。この池の前のプールも1994（平成6）年の会館を大修理した際に、池を埋め立てて一帯を公園としました。

(2) 宇部の復興

宇部市は爆弾・焼夷弾により工業地帯と市街地を焼失しました。数回の空襲を受け、なかでも、特に1945（昭和20）年7月2日の被害が大きく、罹災人口が2万5424人、死者254人、負傷者537人、行方不明者68人だったそうです。

復興は、まず地域の清掃からはじまり、街路と水路を確保し、宅地として利用可能な土地をつくりました。市の中心部には、幅50メートルもの道路をつくり、「緑と花の工業都づくり」を進めました。

街にも徐々に活気が戻り、商店街も賑わいを見せた。1941（昭和26）年当時の商店街としては、北町・三炭町・港町・錦橋通り・万来町・岬通りなどが中心となったようです。その後、錦橋三丁目の商店街にアーケードができたり、新たに宇部百貨店ができたりするなど、宇部市の商業の復興は進み、市街地の様子が変わりました。



(3) 炭鉱の発展と衰退

宇部市は戦争で大きな被害を受けましたが、戦後の石炭景気に支えられ、順調に復興しました。

その後、海外の石炭の輸入が増えたことや主要な燃料が石炭から石油に代わったことなどから、石炭産業は全国的に衰退しました。宇部市でも多くの炭鉱が閉山し、一時は人口も減少しましたが、化学工業中心の産業に転換することで活気を取り戻しました。

ヤマ 炭鉱に生きる

炭鉱で働く人たちは、地下深くで行う危険な仕事が多いために、過度の緊張を強いられ、生活に対して特別の思いがありました。

戦後復興の石炭増産政策により、住宅が無料で提供されるなどの優遇措置が取られ、多くの人が炭鉱に就職しました。やがて、大手の炭鉱では経済的な面で恵まれるようになり、作業の機械化が進みました。

一方で、産業界では、燃料が石炭から重油へと転換され、炭鉱によっては休止や廃止に追い込まれました。そのため、労働者が離れ、人口が急速に減少する地域が見られました。



ビッグハンマーで削壁
(昭和30年)



ドラムカッター等
大型機械の導入
(昭和38年)

(4) 市街地の発展と衰退

宇部市の商業は、炭鉱採掘の隆盛^{りゅうせい}とともに発展してきました。海岸の炭鉱付近に商店街が発達したことによって、東西に帯のように広がる現在の市街地が形成されました。戦時中の空襲では、市街地の中心部であった宇部市役所（現在の宇部郵便局付近）周辺地域が全焼しましたが、戦後の戦災復興都市計画により復興しました。このとき空襲による被害が少なかった中央町地区に発生した闇市が、のちに発達し、宇部中央銀天街となったそうです。

炭鉱が閉山した後は、市街地の両翼に当たる居能地区・岬地区の商店街が衰退していったものの、中心部の商業は発展を続けました。最盛期には「中央大和」^{だいわ}「駅前大和」^{だいわ}「ダイエー宇部店（後に「Let's O9」）」「宇部丸信」「エムラ宇部支店」「宇部井筒屋」など多数の商業施設があり、衰退傾向が見え始めていた1992（平成4）年でも中心市街地の歩行者通行量は連日5万人を超えていたそうです。

一方、宇部市周辺の郊外においては大型ショッピングセンターが相次いで出店しました。モータリゼーションの進展するなかで、大型の駐車場をもつこれらの商業施設に消費者が流出しました。そのため、駐車場を持たない、あるいは台数が少ないという問題に対応できなかった中心部の商業施設の閉店が相次ぎました。